

目的：第44会日本家政学会総会における一連の「乳幼児衣料の表示に関する諸問題と着衣実態についての研究」の第2報で、出生順位による表示に対する認識度の差や、第3報で大きめサイズの衣服着用が多いことなどが明らかにされた。本研究は、大きめの衣服着用における運動機能性や母親の育児経験の差などを明らかにすることを目的とした。

方法：資料は、1990年の乳幼児衣料の質問紙調査（被服構成学部会実施）のデータファイルから7～24か月の男児383例、女児387例合計770例を抽出して、新たに因子分析・クロス集計などの解析を行った。運動機能の発達段階に従い、7～9, 10～12, 13～18, 19～24か月の4月令群に区分し、さらに出生順位が第1子とそれ以外の子どもの場合に分類して解析を行った。取り上げた服種はカーディガン、布帛のブラウス、ニットのシャツ、長ズボンの4種類である。また、フィールドワークや事例実験により乳幼児の生活行動での大きめの衣服着用の適否をビデオ・単写真で観察した。

結果：①第1子の方が大きめサイズを購入する傾向がみられ、その差は1才前の早い時期に顕著であった。大きめサイズを購入する比率はカーディガン>布帛ブラウス>ニットシャツ>長ズボンの順に高かった。②大きめを着せる時に手を加える比率は長ズボンが最も高く、第1子では月令とともに上昇するが、その他の子どもでは歩行前の早い時期から高い比率を示した。③大きめの着用による不都合を示す比率は長ズボン>カーディガン>布帛ブラウス>ニットシャツの順である。具体的な不都合点を自由記述から分類整理した結果、長ズボンは丈が長いことの危険性を、カーディガンは動作への支障を、布帛ブラウスは袖の折り返しが元に戻る支障を挙げる例が多数を占め、フィールド観察や事例実験によってもその様相が確認された。